

研究ノート

親への移行期における高年初産婦の夫婦が認識する夫婦の関係性の変化

中島久美子¹⁾・早川有子¹⁾・臼井淳美²⁾Changes in Marital Relationships Recognized
by Older Primiparous Couples During the Transition to ParenthoodKumiko NAKAJIMA¹⁾・Yuko HAYAKAWA¹⁾・Atsumi USUI²⁾

キーワード：夫婦関係、親への移行期、産後クライシス、高年初産婦、事例研究

I. 緒 言

妊娠期から産後の時期は、親への移行期に位置付けられ、親役割の課題を担う家族発達段階の新たなステージへの移行期であり発達の危機に直面しやすい。Belsky¹⁾は、初めて子どもを迎える夫婦の妊娠期から、子どもが1歳になるまでの夫婦の関係性の変化について調査し、子どもを持つと夫婦関係の満足度が低下することを明らかにした。我が国においても、初めての子どもの誕生により夫婦の関係性が低下する「産後クライシス」が報道され²⁾、出産を機に妻に家事育児の過重負担が生じ、夫の理解が得られないことから夫婦関係が悪化することが問題視されている。さらに、産後のパートナーへの満足度や夫婦関係の親密度は低下し、その割合は夫よりも妻の低下の度合いが大きいことが明らかである³⁾。これまでに、第1子出産前後の夫婦関係の変化を明らかにした研究はあるが^{4,5)}、これらの研究結果は、妻もしくは夫の一方の認識から捉えたものであり、夫婦の認識から捉え、夫婦の関わり合いを検証したものではない。

我が国では、35歳以上の高年初産婦が増加しており、高年初産婦では、妊娠・出産の異常の発生率が高いこと、さらに、若年初産婦や経産婦に比べて、身体的・精神的健康が脅かされ、育児不安や抑うつ状態に陥る可能性が高い^{6,7)}。Nakajima, et al.⁸⁾は、高年初産婦の夫婦を対象に調査し、高年初産婦の身体的・精神的負担に対応した夫の関わり的重要性を指摘している。

これらのことから、親への移行期にある高年初産婦の夫婦において、どのような夫婦が産後に良好な夫婦の関係性を構築し、どのような夫婦が産後クライシスを招きやすいのか、夫婦の関係性を検討することは、親への移行期における高年初産婦の夫婦の良好な関係性への看護支援に繋がると考えた。

本研究の目的は、高年初産婦の夫婦が認識する親への移行期における夫婦の関係性の変化を事例研究によって明らかにすることである。

II. 用語の操作的定義

1. 親への移行期：第1子出産前後に焦点を当て、妊娠期から、産後の育児の不安感や疲労感の最も強い時期を過ぎ、母児の生活リズムが安定する産後3カ月の時期。
2. 夫婦関係：夫婦で子どもを育てるという共同目標を持ち、夫婦間の共感的なコミュニケーションの基で精神的な安定が図られ、相互の親密性と連帯性を強めていく関係性⁹⁾。

III. 研究方法

1. 研究デザイン

事例研究では、「ある現象や母集団に対する理解を深め、理論化を図る」際に multiple-case study design が適用される。本研究では、高年初産婦の夫婦が親へ

1) 群馬パース大学 2) 大東文化大学

の移行期の夫婦の関係性の変化をどのように捉えているかの事象を明らかにするという特性から multiple-case study design の事例研究とした¹⁰⁾。

2. 研究参加者

本研究は、高年初産婦の夫婦を対象に、妻の心身の健康状態と夫の関わりについて、妊娠期、産後1カ月、産後3カ月の3つの時期に縦断的に調査した研究の一部である。今回の調査は、産後3カ月の高年初産婦の心身の健康状態と夫の関わりに関する調査研究のうち、親への移行期における夫婦の関係性の変化の内容のみを研究データとして扱い、産後3カ月を調査の対象とした。研究参加者は、A市の出産準備クラスに参加した高年初産婦の妻とその夫であり、調査に同意が得られた8組(計16名)を対象とした。研究参加者の選定基準は、妻が35歳以上の初産婦であること、夫婦ともに研究の趣旨に同意しインタビューに参加できることとした。母児の健康状態に重篤な合併症等が生じ、妊娠中の入院、及び産後の基準を超える期間の入院を要する場合には、対象から除外した。

3. データ収集

面接調査は、研究者と妻もしくは夫の1対1で面接を実施した。場所は研究参加者の自宅もしくは研究者の所属大学で実施した。面接時間は産後3カ月時の調査の全体で妻平均43(32~50)分、夫平均32(18~46)分であった。面接記録は、面接中にメモ及びICレコーダーに録音をとり、終了後、インタビューの内容を逐語録として文章化した。

4. 調査内容および調査期間

1) 研究参加者の概要

夫婦の年齢、妻の就労、妊娠の成立、妊娠経過、分娩経過、産後の手伝いや里帰りの状況等とした。

2) 調査内容

妻および夫に対して、「産後3カ月経った今、ご主人(あるいは奥様)との関係が妊娠中と比べて変化したと感じますか?」「どのように変化したと思いますか?(あるいは、変化しないと思うのはどうしてですか?)」と尋ねた。

3) 調査期間

2016年9月~2017年5月であった。

5. データ分析

データの分析は、妻と夫、各々の逐語録を何度も読み返し、妊娠期から産後3カ月の夫婦の関係性の変化と捉えられる部分に注目し、文脈単位で抽出し、抽象度を上げて妻のコードと夫のコードを作成した。その後、妻と夫のコードを統合し、事例ごとに夫婦の関係性を検討した。最終的に8組全体で夫婦の関係性の様相を分類し、これらの夫婦の関係性の様相から夫婦の関係性タイプに分類した。

分析の過程では、質的研究法を熟知した母性看護学の研究者3名で分類や命名を繰り返し検討し、精度を高め、結果の信頼性の確保に努めた。また、研究参加者から得られた語りの内容については、調査後に逐語録の段階において、研究参加者に確認をとりデータの信頼性の確保に努めた。

6. 倫理的配慮

研究参加者からの研究参加協力に関する同意は、面接開始前に、研究者が本研究への参加は自由であること、途中でいつでも中断できることなどを口頭及び文書を用いて説明し、同意書に署名を得た。夫婦の関係性について想起することにより精神的ストレスを伴う可能性を考慮し、同意した後も研究協力を希望しない場合は辞退できるよう、研究同意撤回書を研究説明書や研究同意書と一緒に渡した。データを収集する時点から、研究対象者の匿名化・番号化を行い、また、対象者の連絡先とデータは別々の場所に保管し、個人が特定できないようにした。なお、本研究は、群馬パース大学研究倫理審査委員会の承認を得た後に実施した(PAZ16-9)。

IV. 結 果

1. 研究参加者の概要

研究参加者8組の概要は、表1の通りである。夫婦の平均年齢は、妻38.8(35-47)歳、夫42.8(35-55)歳であった。

2. 親への移行期における夫婦の関係性の認識

産後3カ月時点で妊娠期からの親への移行期における夫婦の関係性の変化について、夫婦がどのように認識しているかを明らかにした。これらは5つの様相を示し、最終的に夫婦の関係性は、〈向上〉〈やや向上〉〈維持〉〈やや低下〉〈低下〉のタイプに分類できた(表2)。

表1 研究参加者の概要

事例	妻年齢	夫年齢	妻就労	妊娠の成立	妊娠経過	分娩経過	里帰り期間・夫以外のサポート状況
A	40代前半	40代前半	主婦	不妊治療後妊娠	順調	弛緩出血と癒着胎盤のため輸血	2カ月里帰り・妻の実両親が高齢のため、期待通りのサポートを得られない
B	30代後半	30代後半	常勤	自然妊娠	順調	数時間の早い分娩経過	1カ月里帰り・妻の実母のサポート
C	30代後半	30代後半	常勤	自然妊娠	妊娠糖尿病合併	無痛分娩、吸引分娩、分娩時尾てい骨損傷	3カ月里帰り・妻の実母のサポート
D	40代後半	50代前半	妊娠・出産を機に退職	自然妊娠	子宮筋腫合併	骨盤位のため予定帝王切開	里帰りなし・妻の実母が高齢のため、気を休められない
E	30代後半	30代後半	パートタイム	不妊治療後妊娠	順調	微弱陣痛のため陣痛促進剤を使用し、長時間かかり出産	里帰りなし・妻の実母のサポート
F	30代後半	40代前半	常勤	自然妊娠	順調	予定日超過のため陣痛促進剤を使用し、3日間かかり出産	里帰りなし・夫以外のサポートなし
G	30代後半	40代前半	主婦	自然妊娠	順調	微弱陣痛のため陣痛促進剤を使用し、無痛分娩に変更して出産	2カ月里帰り・妻の実母のサポート
H	40代前半	40代前半	妊娠・出産を機に退職	自然妊娠	妊娠糖尿病合併	糖尿病合併により管理分娩、微弱陣痛のため陣痛促進剤を使用し、4日間かかり出産	3カ月以上里帰り中・妻の実両親のサポート

表2 親への移行期における夫婦の関係性の変化

夫婦の関係性タイプ	夫婦の関係性の変化の様相	夫婦の関係性の変化	夫のコード	妻のコード	事例
関係性(向上)タイプ	妊娠中よりもさらに発達する夫婦の親密な関係性	妊娠中よりも夫の家事育児の関わりを通して深まる夫婦の親密な関係性	妊娠中から夫婦と一緒に家事育児を行いたいという気持ちがあり妻の負担を軽減させたい	妊娠中よりも夫の頼りになる家事育児の関わりを実感し夫婦の距離感の深まりを感じる	A
		子どもが生まれても産後の夫婦の時間を大切にしたいという夫婦の親密な関係性	産後の子どものいる生活の中でも夫婦の時間を作りたいという気持ちがあり妻に喜んで欲しい	産後の夫婦の時間を大切にしたいという夫の気持ちに対して喜びを感じる	C
		妊娠中から想像通りの家事育児ができる夫婦の連帯の関係性	妊娠中から夫婦と一緒に家事育児を行いたいという気持ちがあり妻の負担を軽減させたい	夫と一緒に育児をしてくれたので妊娠中に想像した通りの夫婦のチームワークによる育児ができていると感じる	F
関係性(やや向上)タイプ	妊娠中の夫婦間摩擦の関係から変化した夫婦の配慮し合う関係性	妊娠中の夫婦間摩擦の関係から子どもが生まれ変化した夫婦が互いに配慮し合える関係性	産後は妻に感謝の気持ちを伝え妊娠中に比べて夫婦喧嘩にならないように互いに配慮している	妊娠中に比べて夫の家事育児への期待をせずに産後は子どもの前では夫婦喧嘩にならないよう気づかう	D
関係性(維持)タイプ	子ども中心の生活となるが妊娠中と変わらない夫婦対等の関係性	子ども中心の生活となるが妊娠中と変わらない夫婦対等の関係性	妊娠中から家事育児を分担したいと思う気持ちがあり夫婦の関係は変わらない	産後の生活は子ども中心となっても夫婦の関係は変わらない	E、G
関係性(やや低下)タイプ	夫婦の認識の違いから生じる夫婦間の摩擦と修復の関係性	育児に対する考え方の違いから生じる夫婦間の摩擦と修復の関係性	妻をサポートしたいという気持ちがあるが妊娠中に比べて産後は育児に関する夫婦喧嘩が増えたと感じる	後で考えると些細なことでも、産後の疲れから育児に関する夫婦喧嘩が増えたと感じる	B
関係性(低下)タイプ	夫婦の認識の違いから妻の心理的葛藤が生じる夫婦の希薄化の関係性	夫の親になる意識に対する妻の満足度の低下から生じる夫婦の希薄化の関係性	育児がもう少し楽になったら里帰りから自宅に戻ればよいと考えており子どもが生まれても夫婦の関係性は変わらない	里帰り先から家族3人の生活を始めたという私の気持ちに夫は理解を示さず産後も今まで通りの変わらない夫の態度に不満を感じる	H

なお、本研究では、夫婦の関係性の様相を【 】、妻と夫の語りの内容を「」、事例を()で示す。

1) 関係性(向上)タイプ

【妊娠中よりもさらに発達する夫婦の親密な関係性】
この夫婦の関係性は、事例A、C、Fが該当した。

A夫婦は、夫が妻の家事育児の負担感に気づかい、妻も夫の関わりを妊娠中よりも産後に頼もしく受け止め、夫婦の距離感が深まり、夫婦の親密性が発達する関係性を示した。

「妊娠中からやれることは自分でもやって、産後は家事育児も一緒にやって、妻の負担を少しでも軽くしたいし、今後もそうしていきたいですね。妻の里帰り中は、頻りに妻と子どもに会えなかったのです。その代わりに、帰ってきてからは、私も(妻子)に関わることができているので(妻も)良かったと思

ます。(夫A)」「(里帰りから自宅に帰って)主人の方が頼れるな、実家はあまりよくなかったと思いました。妊娠中は、夫は女性特有のつわりとか理解できなくて、どこか遠い感じがしたけど、今は、目の前の子どもの心配をして、一緒に考えてくれます。子どもが生まれて、夫婦の距離感が空くかなと思ってはいたけど、実際には、距離が近く深くなるのだなと感じます。(妻A)」

C夫婦は、夫が産後の子どものいる慌ただしい生活の中でも夫婦の絆を深める時間を作るための努力をし、妻も夫の気持ちを好意的に受け止められており、夫婦の親密性が発達する関係性を示した。

「二人のプライベートの時間は無くなりましたが、定期的に、子どもを実家に預けて、二人だけの時間を作ろうかと相談しました。長時間は無理なので、

半日位、食事に出かけたり、妻も喜んでくれています。(夫C)「主人は、夫婦の会話を増やしたい、夫婦の時間を増やしたいと言ってくれます。主人の実家の親に預けて、夫婦で出かけたとか考えてくれます。嬉しいですね。(妻C)」

F夫婦は、産後の家事育児を夫婦のチームワークで乗り切り、夫婦が互いに感謝の気持ちを抱いており、夫婦の親密性が発達する関係性を示した。

「昼間は妻がみてくれている分、私は仕事から帰ったら頑張ろうという感じです。子育ては、二人でやればきつくないし、一人で全部やろうと思ったら大変です。二人だから、まだ頑張れる。(夫F)」「全部、想定範囲内で起こっているので、チームワークよく夫婦で出来ています。(夫が)年末年始の休みで付きっきりで2週間一緒にいてくれてラッキーでしたね、ありがたかったですね。(妻F)」

2) 関係性〈やや向上〉タイプ

【妊娠中の夫婦間摩擦の関係から変化した夫婦の配慮し合う関係性】

この夫婦の関係性は事例Dが該当した。妊娠中は互いへの不満を抱き摩擦が生じていたが、産後は妻が夫に対して期待を持たずに、夫も妻の負担感を気づかう気持ちを伝えることで、子どもの前では互いに配慮し、摩擦を回避するという夫婦の関わり合いの関係性を示した。

「私も主人をあてにしないようにして、美容室もこの子を連れて行って、その後、灯油を買って帰ります。相手に期待してしまうと、不満も出てしまうから。夫も仕事をしているので、やってくれたことに感謝をするようにしたら、上手くいくから。産後、子どもの前では、お互いにけんかをしないようにという気持ちがあると思います。(妻D)」「この休み2日間疲れて眠りっぱなしです。彼女に負担かけっぱなしで、感謝の気持ちを伝えることしかしていませんね。妊娠中は結婚して半年しかないのに、けんかもするわけです。それが、お互いに落ち着きましたよ、信頼関係も出来てきたし。彼女の方が変わったのでしょうか、母性がでてきたのか。今は、相手が望むことができるようになっていきます。(夫D)」

3) 関係性〈維持〉タイプ

【子ども中心の生活となるが夫婦対等の関係性】

この夫婦の関係性は、事例E、Gが該当した。夫婦は妊娠中から家事育児への夫婦の対等な考えがあり、産後は子ども中心の生活になっても妊娠中からの夫婦

対等を維持する夫婦の関係性を示した。

「夫婦の関係性は変わってないですね。産後は、夫婦で家事も育児もやりたいと妊娠中から考えていましたね。今の段階では、大体分担していますね。休みの日はたまには料理も作ります。(夫G)」「産後の夫婦関係は、子ども中心になっているのはあってもそれほど変わりませんね。(妻G)」

「元々、結婚当初から、夫婦平等、家事も育児も夫婦でしたいということは、今でも変わらないです。お互い仕事をもって、もちろん、両親の助けを受けながら、社会的には良いのかな、子どもの成長にも良いのかなと思いますね。(夫E)」「生活の中心が子ども中心になったということです。それ以外は特に(変わらない)、今でもそうです。(妻E)」

4) 関係性〈やや低下〉タイプ

【夫婦の認識の違いから生じる夫婦間の摩擦と修復の関係性】

この夫婦の関係性は事例Bが該当した。妻は産後の育児の疲労感により心の余裕の無さから夫婦喧嘩が生じていると感じており、夫は妻の負担感を軽減するように関わりたいと望んでおり、産後の夫婦の摩擦と修復を繰り返す夫婦の関わり合いの関係性を示した。

「妊娠中に比べて言い合いが増えました。赤ちゃんへの父親のコミュニケーションの取り方に対して私が怒ることが増えて、後々考えてみるとくだらないことで、それは、疲れから来るのでしょうか。寝不足で私の心の余裕がなくなり八つ当たりが増えたから。(妻B)」「それほど夫婦関係が変わったとは感じません。ごく最近、喧嘩をしましたが、思い返せばこんくだらないことで、何で喧嘩をしたのかと思います。私も妻をサポートしたいし、子育てをしたいという気持ちでいます。(夫B)」

5) 関係性〈低下〉タイプ

【夫婦の認識の違いから妻の心理的葛藤が生じる夫婦の希薄化の関係性】

この夫婦の関係性は事例Hが該当した。妻は子どもが生まれても変わらない夫の態度に憤りを感じており、一方の夫は、育児がもう少し楽になったら里帰りから自宅に戻ればよいと考え、子どもが生まれても夫婦の関係性は変わらないと感じていた。夫の親になる意識に対する妻の満足度の低下から生じる夫婦の希薄化の関係性を示した。

「1カ月を過ぎた頃から、いつ頃、里帰りから戻ろうかと何度も言っているのですが、『まだ、いいよ』

と言われて、3か月もたっしまい、夫が今まで通りの、のんびりした生活を送っていることを腹ただしく思いました。このままだと主人に人見知りが始まってしまうかも。説得して動くより、自分から動いてほしいです。(妻H)」「子どもができたから妊娠中に比べて夫婦の関係が変わったことは、特にはないですね。でも、一番(子どもに)なつかれていないのは僕ですね。妻の家族と一緒にいる時間が長いけど、私は平日夜と、土日だけ一緒に過ごすだけなので。もう少し手がかからなくなってから、自宅に戻る感じでいいと思っています。(夫H)」

V. 考 察

Belsky, et al.¹⁾ (1994/1995) は、親への移行期における夫婦の関係性の変化を、「向上」「変化なし」「少し悪化」「ひどく悪化」の4つに分類している。本研究では、高年初産婦の夫婦の関係性の変化を(向上)〈やや向上〉(維持)〈やや低下〉(低下)の5つに分類してきた。

1. 〈向上〉タイプの夫婦の関係性

Belsky, et al.¹⁾ は、親への移行期において夫婦が「苦労を共にできるか」が重要であると指摘している。【妊娠中よりもさらに発達する夫婦の親密な関係性】を示したA、C、F夫婦が、妊娠中の親密な関係性を産後さらに発達させることができたのは、産後の妻の心身の負担感に対し、妻をサポートするために夫が妻の気持ちに寄り添う努力があり、その夫の関わりに対する妻の満足感を通して、夫婦の心理的絆を深められたという夫婦の関わり合いによるものである。

2. 〈やや向上〉タイプの夫婦の関係性

諸井¹²⁾によると、妻の夫婦関係の満足度を高める要因には、妻の就労状況や夫の家庭内労働状況は無関係であり、妻の心配事や悩みを夫が聞くなどの夫の情緒的な関わりや、妻の能力や努力を夫が高く評価することが妻の満足度を高める要因となる。よって、【妊娠中の夫婦間摩擦の関係から変化した夫婦の配慮し合う関係性】を示したD夫婦では、夫の家事育児の関わりが得られなくても、夫からの情緒的な関わり、妻の母親らしさを評価する気持ちが妻に理解され、妻の満足度に繋がったと考えられる。しかし、妻が産後の全ての家庭内役割を担うことは高年齢の妻の心身の負担感

を増強させ、精神的不健康な状態に陥る可能性も懸念される。夫からの情緒的な関わりが継続して得られるように支持しながら、実際のサポートが受けられる産後ケア等の公的サービスに関する情報提供が必要である。

3. 〈維持〉タイプの夫婦の関係性

【子ども中心の生活となるが夫婦対等の関係性】を示したE、G夫は、夫婦が対等な性別役割分業の考えをもち、妊娠中から夫婦で家事育児を協同し、妻をサポートすることを望んでいた。夫婦関係における対等性に関しては、夫の家事参加が多いほど妻の分担や負担感が少なくなり、夫婦の衡平性と夫婦関係の満足度との関連が指摘されている¹¹⁾。妻は産後に増大する家事育児を夫婦で協力し合っていることに満足と感じ、それが夫婦の衡平性と夫婦関係の満足感になっていた。産後は子ども中心となっても、妊娠中と変わらない家事育児を協同できる対等な夫婦関係であると互いに認識していたと考える。

4. 〈やや低下〉タイプの夫婦の関係性

親への移行期の夫婦には、喧嘩を回避することを恐れずに建設的な喧嘩を行うことが必要であり、この摩擦管理が重要である¹⁾。【夫婦の認識の違いから生じる夫婦間の摩擦と修復の関係性】を示したB夫婦のように、産後は心身の負担感、疲労感から口論となりやすい。しかし、子どもを迎えて初めて夫婦の考え方の違いを目の当たりにしたときに議論をすることで、夫婦の互いの考え方の違いを理解でき、不平やフラストレーションを払拭することができる。建設的な喧嘩を通して、自分の考えや気持ちを聞いてもらい、互いに理解と尊重された実感が得られることにより、夫婦の関わり合いが深まると考える。

5. 〈低下〉タイプの夫婦の関係性

Belsky, et al.¹⁾ は、夫婦が個人を統合してチームとして働くことができるかどうかは、夫側の結婚に自ら積極的に踏み込み、妻を精神的にも身体的にも支える能力に委ねられており、一方の妻側は、子どもが生まれても夫に対して変わらぬ愛情と理解を示し続ける能力を持ち得ているかであると指摘している。【夫婦の認識の違いから妻の心理的葛藤が生じる夫婦の希薄化の関係性】を示したH夫婦の場合、夫側の妻への身体的精神的なサポート能力が十分とは言えず、産後3

カ月においても親子3人家族の再構成がスタートできずにいたことから、妻は夫の父親としての意識の低さに苛立ちを募らせていた。妊娠期の初産の夫婦を対象にした質的研究¹³⁾では、産後の夫婦の関係性が良好に移行するには、夫婦で子どもを育てるという意識の共有化が促進されるように妊娠期から親になる意識に働きかける支援の重要性を指摘している。本研究においても同様に、妊娠期から産後の夫婦にはどのような努力や夫の支えが重要となるかを伝え、夫婦が産後の困難や試練を乗り越えられるように、夫婦の親になる意識に働きかける支援が重要といえる。さらに、夫婦の認識の違いを互いに理解できずに、希薄化した夫婦の関係性から産後クライシスに陥ることを防ぐためには、妊娠期および産後の夫婦参加型クラスにおいて、参加した夫婦の思いを話し合い共有する場を設け、夫婦の相互作用を促すコミュニケーション・スキルを高めることも必要な支援といえよう。

最後に、夫婦の関係性のタイプの分類から親への移行期における高年初産婦の夫婦の関係性を検討したが、本研究では、Belsky, et al.¹⁾が提示した「ひどく悪化」の夫婦は認められなかった。この要因として一つは、本研究の親への移行期の期間は、妊娠期から産後3カ月までの期間であったのに対して、Belsky, et al.の提示した親への移行期は、子どもが生まれて1年までの期間と長く、夫婦の関係性の悪化に移行したと推測される。また、本研究の対象である高年初産婦は、精神的な余裕を強みとして持ち備えており⁸⁾、さらに、研究参加に協力的な夫婦であり妊娠期から関係性が良好であったこと、これらも夫婦の関係性の悪化に移行した事例がいなかった要因と考えられる。

6. 研究の限界と今後の課題

本研究は、対象夫婦が8組と少ないためすべての高年初産婦の夫婦の一般化は控える必要がある。今後は、対象者の数を増やし高年初産婦の夫婦と初産夫婦の関係性の変化の違いについての検討が必要といえる。また、本研究では親への移行期を妊娠期から産後3カ月としたが、今後は産後の追跡調査を継続し、産後クライシスを予防するための妊娠期からの夫婦の関係性への支援を提示する必要がある。

VI. 結 論

研究参加者8組の親への移行期における高年初産婦

の夫婦の関係性の変化の様相は5つに分類された。関係性〈向上〉タイプは【妊娠中よりもさらに発達する夫婦の親密な関係性】、〈やや向上〉タイプは【妊娠中の夫婦間摩擦の関係から変化した夫婦の配慮し合う関係性】、〈維持〉タイプは【子ども中心の生活となるが夫婦対等の関係性】、〈やや低下〉タイプは【夫婦の認識の違いから生じる夫婦間の摩擦と修復の関係性】、〈低下〉タイプは【夫婦の認識の違いから妻の心理的葛藤が生じる夫婦の希薄化の関係性】であった。特に、関係性〈低下〉タイプでは、妊娠期から妻に対する夫のサポートの重要性を伝え、夫婦の親になる意識に働きかける支援が重要である。産後クライシスを予防するためには、夫婦の相互作用を促すコミュニケーション・スキルを伝える必要があろう。

謝辞

本研究にご協力くださった対象者様に心より感謝申し上げます。本研究の結果は、第60回日本母性衛生学会において口頭発表した。なお、本研究は科学研究費補助金（基盤C）課題番号15K11679の一部分である。

利益相反

論文内容に関し開示すべき利益相反の事項はない。

文 献

- 1) Belsky, J., Kelly, J. 安次嶺佳子訳. 子どもを持つと夫婦に何が起こるか. 東京, 草思社, 1995. p.294, ISBN4-7942-0615-1.
- 2) 内田明香, 坪井健人. 産後クライシス. 東京, ポプラ社, 2013. p.184, ISBN10-4591136779.
- 3) 脇田満里子, 小島康夫, 入澤みち子. 妊娠・出産が母親の心理に及ぼす影響—夫からのサポートに着目して—. 母性衛生. 2003, vol.44, no.2, pp.244-249.
- 4) 杉 有希, 香取洋子. 第1子出産前後において妻が感じる夫婦関係の変化—質問紙の自由記述の分析から—. 母性衛生. 2018, vol.59, no.1, pp.90-97.
- 5) 金澤悠喜, 加納尚美. 第1子誕生に伴う夫からみた夫婦関係の変化の過程. 日本助産学会誌. 2018, vol.32, no.2, pp.202-214.
- 6) Sakajo, A., Mori, E., Maehara, K., et al. Older Japanese primiparas' experiences at the time of their post-delivery hospital stay.

- Int J Nurs Prac. 2014, no.20, pp.9-19.
- 7) Satoh, A., Kitamiya, C., Kudoh, H., et al. Factors associated with Late postpartum depression in Japan. JANS. 2009, no.6, pp.27-36.
- 8) Nakajima, K., Usui, A., Hayakawa, Y... Feelings of older Japanese primiparous couples and satisfaction of older primiparous wives with their husbands' support during pregnancy: Focus on the perceptions of pregnant couples. Nursing Open. 2020, no.00, pp.1-9.
- 9) 中島久美子, 常盤洋子. 妊娠期の妻への夫の関わりと夫婦関係に関する研究の現状と課題. 群馬保健学紀要. 2008, no.29, pp.111-119.
- 10) 吉岡京子. 事例研究. グレッジ美鈴, 麻原きよみ, 横山美江編. よくわかる質的研究の進め方・まとめ方(第2版). 東京, 医歯薬出版株式会社, 2016, p.149-167, ISBN978-4-263-23676-5.
- 11) 竹内真純. 夫のサポートが夫婦の結婚満足感を高める. 永井暁子, 松田茂樹編. 対等な夫婦は幸せか(第1版). 東京, 勁草書房, 2007, p.77-94, ISBN978-4-326-64876-4.
- 12) 諸井克英. 家庭内労働の分担における平衡性の知覚. 家族心理学研究. 1996, vol.10, no.1, pp.15-30.
- 13) 中島久美子, 常盤洋子. 妊娠初期の妻が満足と感じる夫の関わりにおける夫婦の認識. 日本助産学会誌. 2011, vol.25, no.1, pp.45-56.